経済学部チャペル講話「**人間を考える**」　2024年10月29日

宝塚の「生」の石積み

本郷 亮　教授　（経済学史）

阪急今津線で宝塚駅に向かうとき、宝塚南口駅を出た直後に武庫川の橋を渡る。そのとき進行方向の左の窓から河原を見れば、縦20m×横10m×高さ50㎝ぐらいの巨大な「生（せい）」の形の石積みオブジェがあるかもしれない（写真１）。それは毎年12月上旬の土・日の２日間をかけて、延べ200人ほどの市民が河原の石をせっせと運んで造る文字通りの力作なのだが、一年を通じて常に存在し続けるわけではなく、大雨や台風による川の増水によって翌年12月までには消滅してしまうことが多い。大人でも動かすのに四苦八苦するほどの大きな石が流されてしまうのだから、自然の力とは凄まじいものだ。しかしまた12月になると大勢の人が集まって来て、賑やかに石を積む。2024年12月に完成した「生」は実に14代目になる。

初代の「生」は、阪神淡路大震災の十年の節目である2005年に、犠牲者の鎮魂のために、宝塚市の現代美術家・大野良平さんによって作られた。その後、有川浩(ひろ)さんの小説『阪急電車』（幻冬舎, 2008）で非常に印象的に取り上げられたのも追い風になり、ますます注目を集め、現在に至っている。私はある防災士仲間の紹介で大野さんたちと出会い、2022年12月から「生」プロジェクトにゼミ生と参加している。それは毎年、次のような３段階で進行する。ちなみに②と③には新聞やテレビがいつも取材に来る。『阪急電車』の有川さんが来ることもある。

1　「生」石積みオブジェの完成

2　中洲の草刈りに励む学生たち

①11月は「草刈り」。鎌を持って武庫川中洲の葦(あし)や雑草を刈る（写真２）。河原の草刈りなんて普通なら一生経験しないはずだ。重労働なので、学生の若い力は本当にありがたい。これは②③のための下準備だから、一般の人々は参加せず、スタッフだけでやる。

②12月は「石積み」（２日間）。スタッフは早朝に集まり、一般参加者が中洲に渡れるように事前に橋を作る（写真３）。真冬の早朝に河原で水仕事をするには、なかなかの根性と志がいる。そこは体育会学生の出番だ。皆の嫌がる辛い任務を引き受けてくれて、ありがとう。それから、大勢の一般参加者によって河原の石が積まれ、巨大な「生」の字が制作される（写真４）。家族連れも多い。そして各自、墨で石に好きな字を書く（平和、命、夢、♡など）。

3　橋を作るのは最も辛い作業

4　大勢の人が橋を渡り、石積みを開始

③最後に１月16日は「ライトアップ」。日没前に大量の懐中電灯をセットする（写真５）。そして、震災発生時刻のちょうど12時間前、すなわち16日17時46分に、ハンドベルの音を合図に黙祷し、続いて元宝塚歌劇団の絵莉千晶（えり・ちあき）さんの「アメイジング・グレイス」独唱を含む短いセレモニーが執り行われる。闇の中に輝く「生」の字、そして大野さんを中心に横一文字に並んで黙祷する学生たちの姿は本当に美しく、映えの極致と言ってよい（写真６・７）。そのシーンの写真は、毎年、震災の日の朝刊によく使われ、第１面に載ることもよくある。写真７は、2023年１月17日の朝日新聞（朝刊）第１面からのもので、私が一番好きな写真だ。

5　日没までに大量の懐中電灯を置く

6　大野さんを中心に一文字に並んで黙祷

7　朝日新聞（23年１月17日朝刊）第１面より

8　阪急電車とライトアップ「生」

「生」プロジェクトの注目すべき点として次の３つが挙げられる。第１に、地域の力すなわち一般参加者を大切にする点である。地域の理解があってこその活動なのだ。第２に、アートの力によって社会にメッセージを伝える点。経済学部の教員である私は、地域活性化における芸術の力について深く考えたことがなかった。第３に、「何度流されても再生するぞ」というそのものズバリのコンセプトである。個々のものはやがて消滅する。それを前提し、大事なものをリレーのようにつなぐ。大事なものとは、要するに「負けるな」「生きろ」というシンプルなメッセージだろう。その発想が実に面白い。そもそも人生というものも、無駄なものなど一切無いように思うと同時に、すべてが壮大な無駄かもしれないとも思う。結局、人間の考え方次第である。まもなく阪神淡路大震災から三十年。あの震災は、石積みに参加するゼミ生たちが生まれるずっと前の過去の出来事だ。若者たちにとって石積みの意味とは何だろうか。